

旧友と辿った思い出の山旅（涸沢で滞在

槍ヶ岳山頂は、周囲に何ら遮るものは無く三六〇度をぐるりと見渡せ、下界を睥睨できた。

僕らを導いてくれたルートの西北側は、直下に先刻まで格闘していた西鎌尾根がむき出しの岩肌を見せ、これまでの道のりが記憶とともに眼下の雲海に没しつつあった。

北東側には、牙をむいた北鎌尾根があった。新田次郎さんの「孤高の人」で実在した主人公が、早足の単独行をつらぬき不死身と云われながら、友人の強い願いに断り切れずに付き合った吹雪の厳冬期、眼の前で力尽きて凍死した友人をあたかも追うがごとく遭難死したことで知られる難所だ。

南方には大きく落ち込んだ大キレットの先に穂高の岩峰が神々しく連なっていた。そして南東の方向遥かに富士山が超然としていた。

槍ヶ岳山頂で一休みしてから、その日は近接する野営地に設営。

二人ともさすがに疲れて、泥のように眠る。

翌朝、ここからのルートを保田君と練った。

目指すは涸沢カール。

僕らは、日本で第一級の難所と云われる大キレットを経由し穂高から涸沢へ入るルートは怖くて考えられない。当然ながら、梓川の源流・槍沢を下りながら上高地方面の拠点・横尾谷から涸沢カールへ迂回する安全なルートを選んだ。初心者にとつての当たり前の選択だった。

涸沢カールに滞在

涸沢カール（からさわ）。カールは氷河の浸食で生じた窪み・二、

三〇〇(三)は、三千級の名峰四座に囲まれたわが国屈指の岳人の聖地。

その涸沢カール滞在が今回の山旅の最終章。

僕らは、上高地へ向かう道を横尾谷で右折し一路、涸沢へ・・・そしてようやく涸沢入りした野営地にはびっくりするほどのテントが一村を成していた。ほぼ五〇張を超える。周囲の岩稜をアタックする大学の山岳部や社会人パーティのようだ。

その村の端にテントを設営した。

落ち着いて、周囲を眺めやると、一様にテントの屋根を開け放って各々夕食の支度に取り掛かっている様子だった。それを見做って、テントの屋根を開放し、僕らもバーナー、鍋、コッヘル類は一通り携行して来ていたので、食事の支度に取り掛かったが、一体どのような材料を持ち込んでいたのか、何を食べたのか、更にここに来るまで何を食してきたのか、手記にも残して無いため、恥ずかしながら何も覚えていない。ただ飲み水は、要所に小屋があつて助かった。また世に一回ったばかりのカップラーメンを携行してきた覚えはある。

その内、米などの食料をカンパしてもらつて長期滞在する「涸沢乞食※」と称する真っ黒に日焼けしたやからが居住することを知つたが、山の生活レベルにおいて、僕らは彼らとさしたる差が無かつたかも知れない。

※今日では、そうした表現は禁句なのか、パソコンでもスマホでも検索に引っかからないので、今や存在しないのか？分からない。

その夜、仰ぎ見た天空に圧倒された！

全天を埋め尽くしてきらめく恒星に、僕らは声を失った。誰もが

思うように、自らの存在の何たるかを問われるひと時であった。

翌朝、光が差し込んだばかりの涸沢カールで周囲を仰ぐ。

北側に北穂高（三、一〇六[㍿]）・涸沢岳（三、一一〇[㍿]）・奥穂高（三、一九〇[㍿]）そして南側に前穂高（三、〇九〇[㍿]）・・・その穂高四座が涸沢カールの背後を屏風のように囲んで、まるで霊峰に包まれた懐にすっぽりと身を置く心地よさ。

その連峰を背にすると、右手の南方向には西穂高の東壁が見える。井上靖さんの「氷壁」の舞台だ。ナイロンザイルは故意でなければ切れる筈はないと問題になった一九五五年の事故、東壁ザイル切断遭難がモデルとなっている。

その手前には登攀者を拒み続けると云われる垂直壁六百[㍿]の屏風岩、左手の北方向には北穂高、ここには超一流のロッククライミングの舞台・滝谷や最難関の大キレットが近接する。

そして背後に穂高連峰の主峰、奥穂高がある。

そこに登ろうとなった。

ようとして記憶が薄れてしまっているが、ここ涸沢からのルートはしっかりしていた上、軽装であったため大した苦勞の覚えなく奥穂高岳登頂。そして北側にそびえる巨岩のジャンダルムを見上げた時、何びとをも阻む険しさや威厳みたいなものに圧倒された印象がある。そこで軽度の高山病だったのだろうか？保田君の具合が悪くなったため、彼一人涸沢のテントまで下って休むことにした。心配になった僕は追っかけテントに戻ってみるが、気分が治った様子にほっとする。

ただ一座だけであったが、二人して穂高に足跡を残したことになった。

余裕が出てきたところで、当初計画した4人の記念写真を撮った。

ただし下赤君と松岡君は不参加となったものの悔しんでいる筈と氣遣い（！）、紙に彼らの名前を書いて「唯今、生存中」と脇に添えてやった。

一体、何日滞在したのか忘れてたが、寝転がって穂高連峰四座をあかず見上げる日があつたという間に過ぎてゆく。

この日、一大スペクタクル・ショーと云つていいのだろうか？信じられない長大な岸壁の登攀を見物する一日となった。

西穂と奥穂の間にある屏風岩、絶壁が垂直でほぼ六〇度。そこに二人のパーティが挑むという。朝からその様子を涸沢中でテントの屋根を開け払って見入った。

まさしく蟻（表現が不適切で失敬、しかしそう見える）のように取り付いている。その二足の蟻が離れたりくっ付いたりしながら、高さを増して行く。彼らの行動のわずかな変化にも見入る者は息を呑む。そして午後、登り切つて手を振る姿に涸沢中から一斉に口笛や拍手が巻き起こった。ひと際響くヨーデルを歌う者もいて、別世界のような「岳人の聖地」に身を置いた滞在となった。

帰宅したのは出立後ほぼ十二〜十三日後。家族に、また一緒に山の準備をし、拳句は置いてけぼりにしてきた下赤君・松岡君に何ら音沙汰なしの行動で大変な心配をかけてしまった。自分勝手に思い遣りの無い、それこそ不逞で、御免。

（完）